

研究専攻（専門領域）		日本・アジア研究専攻（韓国文化）		学籍番号	05CS007
氏名	大槻 朋子	ローマ字	OTSUKI Tomoko	国籍 (留学生)	
修士学位論文名		雑誌『文化朝鮮』にみる植民地支配下での朝鮮表象			
提出年月日		2009年1月13日		指導教員	権 純哲
体裁 (論文)		65頁（1頁文字数 1560字）		言語	日本語
別冊添付資料等		付録資料 29 頁（『観光朝鮮』『文化朝鮮』総目次 22 頁、主要作家別作品及び掲載号 2 頁、日本旅行協会〈朝鮮支部〉関係年表 5 頁、）			
キーワード		「朝鮮表象」 妓生 国策映画 川上喜久子 榎崎勤 湯浅克衛			
<p>この論文は、1939年、植民地朝鮮において日本語で刊行された旅行雑誌『文化朝鮮』（改題前誌名『観光朝鮮』）の記事から浮かび上がる植民地末期の「朝鮮表象」について検証するものである。</p> <p>この論文は次のように構成される。まず第一章では、『文化朝鮮』の大まかな内容と発行元であるジャパン・ツーリスト・ビューローの誕生と変遷、そして『文化朝鮮』の姉妹誌である日本で発行された『旅』と満州で発行された『観光東亜』を紹介する。第二章では「日朝混合文化」の例として映画と妓生を取り上げた。植民地支配下において国策を目的に朝鮮映画が作られたが、それらは朝鮮人志願兵を勧めるものや、模範的軍人や市井人を描いたものであった。このような映画製作の目的は、皇国臣民化と徴兵制施行の宣伝など、いわゆる内鮮一体を実現するためであったが、より多くの半島人に観てもらうためには、映画の中に慣れ親しんだ朝鮮の風土や生活を取り入れる必要があった。また、妓生については、写真はがきの存在が日本に妓生イメージを伝えるのに一役買った。その後、官妓制度廃止（1908年）とともに、妓生イメージは遊興対象としての性的イメージへと変わるが、現在の芸能人に匹敵するようなアイドル的イメージを帯びたものや、朝鮮観光の象徴的イメージへと変貌していく。このように、妓生は朝鮮文化の代表的象徴であり、観光資源として重要な役割を担った。『文化朝鮮』における妓生たちは文化的素養を備えていたり、親近感を感じさせたりするが、いずれにしても、観光の道具として機能していた。また、第三章では、『文化朝鮮』に朝鮮事情通として度々登場していた作家たち、川上喜久子、榎崎勤、湯浅克衛らの小説や随筆を通して、彼らと朝鮮との関係を踏まえながら「朝鮮表象」を見ていった。彼らはその体験から朝鮮を題材にした文章がすぐに書けるといいう強みがあり、朝鮮観光を宣伝するために大きな力を発揮した。彼らが持つ朝鮮体験は各々異なるが、その貴重な体験を生かしながら戦後も作品や人生に反映させていった。</p> <p>1910年、韓国併合により日本の植民地支配が始まり、日本を「内地」、朝鮮を「外地」と呼び、朝鮮は日本の「一地方」として捉えられていたが、一般の人々にとって、朝鮮は同じ日本であっても遠い異国でしかなかった。未知なる「外地」を紹介する目的で、『文化朝鮮』は大衆的旅行雑誌でありながら、学者、作家、役人などの専門家に執筆を依頼し、文化的水準の高い記事を掲載することができたのは、朝鮮総督府との密接な繋がりがあったからこそであり、この点についてはこの雑誌の持つ特徴と言える。</p> <p>このように、『文化朝鮮』は旅行文化を提唱しつつ、植民地支配下の朝鮮文化を幅広く、また時には深く掘り下げて紹介したが、それはあくまでも宗主国日本が朝鮮総督府を通じて計画、展開されたものに他ならず、いわゆる制限された枠の中での「朝鮮表象」であったと言える。</p>					